

ISSN 2423-9461

アジア・文化・歴史

第13号

2022年2月



アジア・文化・歴史研究会

【目次】

夜半亭随記 —— 巴人・蕪村・几董と「王維が垣根」	堀 誠	1
偶然の出会いという方法 —— 千葉俊二『谷崎潤一郎 性慾と文学』をめぐって	柿原 和宏	14
江戸川乱歩の失われた恋愛と、汚された性欲 —— 谷崎潤一郎の恋愛と性欲と比較して	柿原 和宏	22
文楽とノ文楽の、「 ^{ニュー・ノーマル} 新しい日常」	津久井 隆	48
不思議な年、2020年、そして2021年	秦 政春	105
日本におけるデス・エデュケーションについて	鈴木 康明	112
統制下の新聞報道について考える —— 『夢声戦争日記』を出発点に	内藤 寿子	126
戦前期シアトルにおける日系移民と金融業 —— 太平洋商業銀行の形成と蹉跌	出雲 勇一郎	150
『ボヴァリー夫人』日本語訳論 —— 芳川泰久翻訳について	久保田 斉也	172
高密文化と莫言の小説	楊 守森 崔 穎訳 山本 幸正訳	207
中国の特色ある学術とは つまるところ何を意味しているのか？	曲 衛国 山本 幸正訳	216
「外国文学研究は中国の視点を強化すべきである」 という提言に、なぜ疑義を呈しなければならないのか？	曲 衛国 山本 幸正訳	220

不思議な年、2020年、そして2021年

秦 政春

キーワード

コロナ禍・PCR検査・オンライン授業・「隔離」・
感染防止対策・日常性と非日常性

1 「不思議」な年の始まり

2020年は、「不思議」な年であった。その前年、もう一昨年のことになる。その年の暮れに、中国のある地域で、おかしな病気が流行っていると聞いた。そのときは、ほんの噂話の程度で、とりたてて気にも留めていなかった。いま思えば、これが「不思議」な年の始まりだった。

そして、年が明けた。中国では、春節を迎える季節になった。そのころから、事態はかなり急速に変化した。その病気が流行っているといわれる地域が、「閉鎖」されるというニュースが飛び込んできた。いまも、その映像は鮮明に印象に残っているが、その地域から高速鉄道などを使って避難する大勢の人たちの様子である。

こうした緊迫した状況は、すぐに上海にも伝わってきた。筆者の周りでも、絶対に外出しない、ネットで食料品を大量に買い込んだという話が飛び交うようになった。とくに、そのとき深刻な話題は、マスクが足りない、どこに行けば手に入るのかといったことであった。

春節というのは、中国の人たちにとって、とても大切なお祝いの日である。子どもたちだけではなく、大人も心待ちにしている。例年、この時期になると、どこかうきうきしたような雰囲気を感じられる。

ところが、昨年、つまり2020年の春節は、とてもお祝いといった感じではなくなってしまった。筆者は、たまたま手続きの関係があって、お正月、そして春節を上海（大学）

で過ごしていた。むろん、大学には、ほとんど人はいない。それよりも、驚いたのは、街の様子である。

街の様相が、それまでとは一変した。いや、街だけではない。すべてにおいて一変した。国際交流処の人が、わざわざマスクを届けてくれた。そして、外にはできるだけ出ないように、いろいろなものに触れないように、といったことをとても丁寧に教えていただいた。

そのときあたりから、大学を出るとき（出るといっても、ほんの買い物程度だが）門で検温が行なわれるようになり、特別の「通行証」（のようなもの）を使って出入りするようになった。研究室のある建物の中も消毒をするようになり、消毒液の臭いが充満していた。

まさに、物々しい雰囲気が変わった。それ以上の驚きは、さきほどすこし書いたように街の様子である。いつもは、かなりの通行量のある道路だが、走っている車が本当に少ない。大学の周りには、レストラン街を含む大きくて広い商業施設がある。いつもは、たいへん賑わっている場所である。ところが、ほとんど人がいない。

むろん、店も閉まっている。普段なら、車、バイク、自転車でぎっしり埋まっている駐車場も、ガラんとした状態である。そのとき、やむを得ない事情があつて、地下鉄に乗った。平常のときなら、まあまあの混み具合である。ところが、そのときの乗客は各車両に1人いるかないかであった。

街の中から、人も車も完全に消えてしまった。時期は、春節である。にもかかわらず、こんな状態であった。

こうした緊迫した状況の中で、ある卒業生が筆者のことを心配して、果物をもって訪ねてきてくれた。学内には、もう誰も人はいない。守衛さんを見かけるぐらいであった。いったい、どう過ごしているんだろうと心配してくれていた。街中に緊張感があふれる最中に、わざわざ訪ねてきてくれた優しさをいまでも鮮明に覚えている。

これが、2020年という「不思議」な年の始まりだった。いわゆる「コロナ禍」と呼ばれる状態の、もっとも最初の姿ということになる。

ただ、まだこのときは、こんな状態がこれほど長く続くとは、とても予想できなかった。ところが、それから1年以上も経ったにもかかわらず、事態はいっこうに収まる様子を見せていない。それにしても、この1年は（もう、それ以上になるが）、多くの人たちと同様、筆者にとっても「非日常」の毎日であり、「不思議」な感覚の日々であった。

日本からのオンラインでの授業、そして試験。そのうちに、日本でも感染者が増え始

め、「緊急事態宣言」など一定の施策もあって、外出を自粛するような生活に変わっていった。かといって、ずっと日本にいるわけにもいかない。いろいろな制約があったが、思い切って2月に上海に戻ってきた。上海に戻るといっても、普通の状態ではない。PCR検査、煩雑なさまざまな手続きなど、かなりの負担がある。

本小論では、この「非日常」で、「不思議」な1年を、筆者の個人的な感想を交えて、振り返ってみたい。

2 オンライン授業の開始

さきほどの話に戻ろう。春節の直後に、日本に帰った。2月5日だった。やはり、人は少なかった。空港ロビーから外を見ても、飛行機の数も少なかった。しかし、想像していたほどではなかった。そして、空港職員も、乗務員も、この段階では普通の服装（制服）であった。服装（制服）のことについては、またあとで触れるつもりである。乗客も、けっして少ないというわけではなかった。いつもは、満席だが、今回はすこし空席がある程度であった。

日本に着いた。こちらは、ほとんど普通の状態である。まだ、この時期は感染者が少なかったという事情もあるが、マスクをしている人は、全体の3割程度といったところか。とても、とても半数に満たない。なによりも、中国の、上海の緊張感にあふれる状態を目の当たりにしてきたせいも、その違いに驚いた。日本では、ほとんどなんの心配もしていないという雰囲気である。周りの人たちの話題も、日本のことではなく、中国は大丈夫ですかといったことに終始していた。

それはともかく、そのうちに大学のほうは徐々に冬休みも残り少なくなってきた。しかし、新学期がどうなるのか、なかなかわからなかった。しばらくして、新学期の開始は1週間ほど遅れるという連絡がきた。しかし、それ以上の詳しい情報はなかなかこなかった。

いま、ちょうど日本がこういった状況におかれているが、こういったときの対応はかなり難しい。とくに、中国の大学の場合は、全寮制ということもあって、その難しさは容易に想像できる。

そうこうしているうちに、今度はオンラインで授業を開始することに決まったという連絡がきた。状況が状況だけに、これはやむを得ない措置だろうという印象だった。授業開

始は3月9日、そのまえの週はテスト（試行）期間ということになった。しかし、そのときは、まだ楽観的な感じだった。4月の末には正常に戻るだろう。あるいは、5月の連休明けになるかもしれない。先生たちとの間でも、こんな話題が出ていたくらいである。

ところが、その4月がきても、5月の連休が明けても、見通しが立たないといった状態が続いていた。そして6月。もう、学期の終盤である。この時期になると、かりにいますぐ授業などを「正常化」したとしても、もうあまり意味がない。正常化は、夏休み明けからではないかという見方に変わってきた。

ところで、オンライン授業と一言でいっても、簡単ではない。いまでこそ、慣れてきて要領も理解できるようになった。しかし、当時は、すべてにおいて初めての経験である。これは、中国人の先生がたにとっても同様である。やり方などを質問しようにも、自分のことで精一杯という感じだった。

しかも、授業で使用するアプリの問題もある。いろいろな状況を考えれば、中国製のアプリということになる。ところが、これのインストールが想像以上に厳しかった。中国製のアプリをインストールする場合、本人を認証する必要がある。中国では、これは一般的には中国の携帯電話の番号を使用する。

具体的にいうと、アプリをインストールしようとする、本人を認証するために携帯電話の番号を入力する必要がある。そして、その番号にショートメッセージで、インストールするときに必要なパスワードが送られてくる。このパスワードを入力しなければ、アプリのインストールはできない。

ところが、日本にいるため、中国の携帯電話は通じない。当然、届いているはずのパスワードを読むことはできない。つまり、一般的な方法では中国製のアプリを日本でインストールすることは不可能ということである。しかし、これも卒業生や学生たちに助けてもらった。2月に筆者のことを心配して大学まで訪ねてきてくれた卒業生と同様に、いろいろところで卒業生や学生たちに支えてもらった。いまさらながら、それを実感している。

さきほど、正常化は夏休み明けではないかと書いた。事実、学期の後半には、中国では感染者数もかなり減少してきており、ほとんど落ち着いた状態に変わってきていた。もう、中国は完全に感染を「抑え込ん」だという見解も出てきていた。ちなみに、日本は7月末から8月にかけて新規感染者数が増加したが、まだこの時期は2,000人には満たない程度であった。

しかし、結局のところ、さまざまな事情を考慮してか、夏休み明けの新学期の授業は、

中国人教員は「対面授業」、筆者をはじめ日本人は「オンライン授業」ということになった。それでも、学期当初には、適当な時期には自由に上海に戻れるのではないかといった期待感もなくはなかった。しかし、それはたんなる期待感に過ぎなかった。

それ以降の日本は、かなり深刻な状況をむかえた。11月初旬から新規感染者が徐々に増え始め、1月の最初の頃にはその数が8000人にも達するほどになった。いわゆる「第3の波」といわれているものだが、かなりの「大波」である。それにともなって、日本からの渡航を制限する国も増えてきた。中国もその一つである。

中国は、あとで詳しく述べるつもりだが、PCR検査の厳格化と、一定の期間の「隔離」という措置が義務づけられている。一般にいわれる「水際対策」である。どこの国でも、ある程度は行われているが、国外からの感染を防ぐということである。中国の場合は、国内の感染については、かなり「抑え込ん」だ。今後、必要なのは、外国からの感染を防止することである。

3 「非日常性」の毎日

そんな事情もあって、9月からの学期も結局すべてオンライン授業で行なった。筆者の授業内容に関しては、ここでとりたてて述べるほどのことはない。基本的にはZOOMを中心に、必要に応じてWeChatやQQを併用して行なってきた。

それよりも、2月に日本に戻ってからの生活、あるいは生活感といったものである。ひとことでいえば、「非日常性」の毎日、あるいは「日常性」の喪失といってよい。むろん、これは、多かれ少なかれすべての人に当てはまる現実である。日本でも、中国ほどではないにしても、外に出ないように、人と会わないように、外で食事をしないようにといった雰囲気が支配的である。

ただでさえ、こうした状況の中にいるうえ、我々のように勤務地が外国（中国）という人間にとっては、その「非日常性」の傾向がよりいっそう強い。簡単な例をあげれば、いま「いる場所」は日本。しかし、「スケジュール」は中国といった具合である。

しかも、例年とはまったく異なった環境の中にいる。いつもなら、冬休みが終われば上海に戻る。そして、授業が始まる。学期末に試験をして、採点が終われば、夏休みに入って日本に帰る。そのあと、また新学期が始まる。その繰り返しである。

その繰り返しとはいえ、これが生活のリズムである。人間は（むろん、人間だけではないが）、一定のリズムの中で生活をしている。しかし、昨年はこのリズムが崩れてしまっていた。節目のようなものがなく、いつの間にか夏休み。また、新学期。そんな具合に、ダラダラっと過ぎてきたような感覚である。

そのせいか、時間の経過がかなり早かったような気がする。さきほども書いたように、日本に戻ったのが2月5日。アツという間に1年経ったような印象である。

時間の経過はともかく、いつまでもこの状態を続けるわけにもいかない。仕事のこともあるが、大学の研究室、そして自宅も、かなりの期間そのままの状態である。いつになったら上海に戻れるようになるのでしょうか、いつ戻れますかという先生たちの声も聞いた。去年の冬休み、先生たちは筆者が日本に帰れるかどうかを心配してくれた。今度は、いつ上海に戻れるのか心配してくれている。皮肉な現実である。

ビザの取得に関しては、すでにさまざまな制限が設けられていた。いつ頃からかはっきりと覚えてはいないが、少なくとも去年の秋の段階では、上海市からの招聘状が必要であった。これについては、すでに大学から送られてきていたので問題はなかったが、中国への便数もかなり少なく、しかも成田空港などに限定されていた。そんなこともあって、しばらく様子を見ることにした。

しかし、状況は良くなるどころか、さきほども書いたように11月頃から新規感染者の数が増加し始めた。これでは、ますます動きにくくなる。そう思って、急いでビザ取得などの手続きを開始した。

当初、ビザの取得は、上海市からの招聘状があるので、そう難しくはないだろうと思っていた。しかし、実際に始めてみると、そう簡単ではなかった。

まず、「宛先」が日本大使館（東京）になっていたため、福岡の領事館では手続きができないことがわかった（筆者の自宅は福岡である）。そして、いま一つは、「事由」欄に「交流、訪問、考察等」と記載されていた。つまり、「Fビザ」である。しかし、その段階では（おそらく、いまも）、Fビザは取得できない。

そのとき、発給されていたのは、M(商用、貿易)ビザとZ(駐在)ビザのみであった。筆者の場合は、内容からいってZビザを取得することになるが、入国ののち30日以内に居留許可をとる必要がある。

これについてはともかく、招聘状、工作証明書、そして若干の追加書類（Zビザ取得の理由書）を提出することによって、ビザが取得できた。さきほど、そう簡単ではなかった

と書いたが、それでも全体的にみるかぎり、きわめてスムーズに運んだ。

4 上海への出発

ここまでくれば、つぎはチケットの予約である。新学期は、3月1日からと聞いた。上海は、入国して2週間の「隔離」がある。それを考えると、2月14日までの便にする必要がある。ちょうど、14日の夜の便を予約することができた。

続いて、筆者の個人的な事情だが、福岡から成田までの便を予約する必要がある。そして、いま一つ重要なことは、渡航前に中国大使館・領事館で指定された病院においてPCRなどの検査を受ける必要がある。むろん、これも事前に予約しておくことになる。ビザの取得のあと、上海への便の予約に加えて、この二つについても、すぐに予約をした。

ところが、である。この二つの予約に関して問題が生じた。まず、福岡・成田便のほうである。日本では、ちょうどこの時期に感染が拡大して、いくつかの地域で「緊急事態宣言」が出された。これにともなって、航空会社では減便せざるを得なくなっただけでなく、ちょうど予約しておいた便が運休になった。そのため、振替の便を紹介してくれたが、それでは上海便に間に合わない。やむなく、ほかの航空会社の便を、大急ぎで予約した次第である。

さらに、もう一つのほうである。予約しておいた病院から連絡がきて、感染者が急増しており、その対応に追われている。自分の病院では、とても検査をしている場合ではないとあって、ほかの指定病院を紹介してくれた。すぐに、その病院に連絡をとって、予約をすることができた。

いずれも、筆者の個人的な状況で恐縮だが、それにしても今回の事態ならではの象徴的な「できごと」ともいえる。

ここで、搭乗の2日間以内に、必ず受ける必要がある検査のことについて書いておきたい。この検査には、「PCR検査」と「抗体検査」の2種類がある。この検査を受けて、「ダブル陰性証明書」を取得する必要がある。これを取得したのち、所定のQRコードにアクセスして、まずアカウント登録をする。そして、受診した検査機関、健康状態、個人情報を入力して、さきほどの「ダブル陰性証明書」をアップロードする。

これを、中国大使館・領事館で確認し、それが完了すると“HDC”マークのグリーン健

康コードが取得できる。搭乗は、このグリーン健康コードの有効期限内である。したがって、かなり慌ただしい。しかし、これがないと搭乗できない。渡航にさいして、まず必要なものである。

さきほどの国内便が運休になって、他の便に変更したとき、ある先生から「もし、それが運休になったら、どうする、どうする」と再三にわたって言われた。しかし、こればかりは、どうしようもない。早く成田に到着できないのかとも言われたが、直前のしかも期限内に指定病院での PRC 検査がある。そうした、状況がある以上、簡単に動くわけにもいかない。いよいよのときは、新幹線を使うことも考えていた。

グリーン健康カードの取得にしても、けっして簡単ではなかった。最初の QR コードへのアクセス、アカウント登録にしても、基本的に「形式」は中国である。日本人には、なかなかわかりにくい。やむをえず、これも卒業生に助けてもらって、なんとか解決することができた。しかし、必要事項を記入して、「ダブル陰性証明書」をアップロードすれば、すぐに返信がくるわけではない。申請が殺到していることも予想できる。これが届くまでは、やはり落ち着かない時間である。これが届いたときは、さすがにホッとした。

これで、少なくとも搭乗はできる。しかし、これでヤレヤレというわけではない。このコードが必要なのは、搭乗のためのチェックインまでである。それ以降に、これを使うことはない。

空港では、つぎの手順が必要になる。じつは、この手順からが、実際に入国するための手続きになる。実際の手続きは、ここから始まるといっても、けっして過言ではない。

いや、それはたんに手続きだけの問題ではない。さきほどから、「非日常性」という言葉を使っているが、ここからのほぼ3週間は、これをもっとも端的に象徴するものであり、「非日常性」が際立つような日々になる。いってみれば、1年間の「非日常性」をまさに凝縮したような3週間である。

これから、一つひとつ山を越していくような生活である。福岡から成田、そして成田から上海便への乗り継ぎのため、成田には早めに着くようにした（成田発は夜の便）。いま、思い出してみると、午前中に成田に着いて、上海便を待っているひとときが、とても平和な時間だったような気がする。

5 上海に到着、そして手続き、検査

空港では、カウンターでのチェックイン手続きに加えて、もう一つ重要なことがある。「健康確認申告書」というものに記載する必要がある。成田では、カウンターの横に掲示板のような形で、これの記入方法に関する手順が示されていた。掲示されている QR コードを読み取り、そこに必要事項を記載する。

必要事項は、たんに健康確認だけではない。ここ 2 週間ほどの行動歴、実際の居場所（住所）、そして機内での座席番号なども記入する。こういった内容をすべて書き終えた段階で「送信」する。そうすると、「健康状況申告書 ID」という QR コードが取得できる。ここには、「入国／有効期限」が書かれている。おそらく、受理された時間からだと思われるが、ちょうど 24 時間である。

上海（浦東空港）に着いてからは、この QR コードがきわめて重要である。到着したあと、つぎつぎと手続きがある。そのとき、すべてこの QR コードを提示して進んでいく。長い長い距離を歩いたが、すべて専用の通路である。専用の通路といっても、たしかビニールシートのようなもので、通路が作られていたと思う。そして、PCR 検査を受けた。

このあと、つぎの段階に進む。検査を終えて、ずっと歩いていくと、さきほどの成田にあった掲示板と同じようなものが置いてあった。やはり、QR コードが提示されている。これを読み取って、また必要事項を記入していく。ここでは、個人情報だけでなく、それに加えて職業、勤務先、自宅の住所などといったものをこと細かく記入する。そして、書き終わったあと「送信」する。その手続きによって、ここでは「空港入境旅客情報」といったような QR コードが取得できる。

これ以降は、この QR コードを提示して手続きを行なっていくことになる。とくに、ここで重要な手続きは、「隔離」先のホテルの決定である。また、ずっと歩いていくと、ホテルにむかうバスの行き先を書いた場所がある。このバスの行き先は、ほとんど市内の区ごとであったように思う。

筆者の勤務先・宿舎は浦東新区である。そこで、この区の名前が書かれた立札のある所に並んで、そこの受付でさっきの QR コードを見せた。そうしたら、コードに記載した住所を見ながら地図で丁寧に確認してくれた。そのとき、勤務先・自宅がこの場所なら、他のホテルのほうがいいだろうというようなアドバイスをしてくれた。そのあと、担当係の人が、おそらくホテルの手配を統括していると思われるところまで案内してくれて、別

の行き先のほうに手続きをしてくれた（ホテルごとに、宿泊者のリストを作成している）。

そこで、しばらく、といってもかなり長かったように感じられるが、バスが到着した。これに乗車した乗客ほぼ 25 人～30 人くらいだった。ほとんど、中国の人たちであった。そういえば、上海への便の乗客も圧倒的に中国の人たちで占められていた。上海に到着したのは、22:30 すこしまえくらいだが、ホテルにむかうバスに乗ったときは、もう午前 0 時をはるかに超えていた。行き先もあまりよくわからないまま、バスに乗ってようやくホテルに着いた。かなり、時間がかかったような気がする。

バスの中で、数枚の書類が配られた。その用紙の数枚には、ホテルでの生活の注意事項、午前・午後の検温、食事が配られる時間などが記載されていた。他の 2 枚ほどの用紙には、記入する必要がある。1 枚は体温、血圧などをはじめ健康状態を記入する用紙だった。もう 1 枚は、あまりはっきり覚えていないが、個人情報を入力したと思う。

この用紙を持って、バスを降りた。そのとたんに、荷物の消毒であった。ホテルに着いたからといって、すぐ部屋に行けるわけではない。今度は、ホテルでの手続きが始まった。地下駐車場から中に入ったが、その一角にテーブルが置いてあって、そこでまずホテル代金の支払いをした。それから、健康に関する問診、血圧の測定、食べ物に対するアレルギーなどについて聞かれた。ほかにも、いくつか手続きがあったように記憶しているが、あまりはっきりとは覚えていない。

そうして、ようやく自分の部屋に着くことができた。ちょうど、午前 4 時であった。その時間まで、卒業生が起きて連絡を待っていてくれた。時間が長いうえに、手続きが煩雑なこともあって、やはり心配だったのだろう。

6 ホテルでの「隔離」生活

こうして、いわゆる「隔離」生活が始まった。ホテルの部屋は、かなり快適であった。生活用品もきちんと整えられており、飲料水も豊富に準備されていた。ポットもあり、ティーバックも置いてあった。これといって、不便はなかった。

「隔離」という言葉を使うので、どこか厳しいイメージがある。しかし、考えてみれば、朝、昼、夕食の三食を運んできてもらって、部屋の中でゴロゴロ(?) しているだけである。こんなに楽なことはない。

それに、普段はどうしても「あれもしなければ、これもしなければ」といった生活に追われている。おそらく、これは誰も似たようなものである。しかし、ここでは何もできない。「何もできない」のだから、「何もしない」という、じつにシンプルな発想である。

そういった意味で、生活の面でも、精神的な面でも、少なくとも筆者の感覚では、とても気楽で快適であった。むしろ、そう感じる「背景」のようなものがないわけではない。日本は、「都市封鎖」などといった厳しい措置はないが、それでも「外出しないように」、「大勢で会わないように」、「外食は控えるように」といった雰囲気は徐々に支配的になってきていた。したがって、「隔離」とまではいかないが、「孤独な生活」に慣れてきていたようにも感じる。そうした事情が「背景」があって、あまり抵抗感を感じなかったのかもしれない。

それに、いま一つ重要なことは、これまでの慌ただしく、「超々」過密なスケジュールのせいもある。成田から始まる、いや実際にはグリーン健康カードの取得から始まる一連のたくさんの手続きや検査は、その数が多いというだけでなく、時間に追われている。短い時間の中で、つぎつぎと手続きを行ない、検査がある。その過密なスケジュールから解放されてのちの「隔離」である。一安心という実感である。

一般に、人間は自由が束縛されたとき、強くストレスを感じる。自由が束縛されるといっても、この「隔離」の場合は、ドアから外に出られないというだけのことである。おそらく、多くの人たちはそのことにストレスを感じるのではなく、自由が束縛されることを「強制」、ないしは「命令」されていること自体に抵抗感があるように思う。

「非日常性」の中での生活は、どうも時間感覚を喪失させてしまうようだ。アツという間に、ホテルでの「隔離」生活が終了した。そういえば、この1年間も、ほとんどアツという間に過ぎてしまった感覚である。

2月26日の夜、明日の9時頃にPCR検査をしますという連絡がきた。検査を受けた夜、隔離が終了という連絡を受けた。そして、その翌日の28日に隔離終了の書類にサインをした。これで、ホテルでの隔離は終了である。「ホテルでの隔離」とあえて書いたのは、ここでの隔離が終了したのち、今度は大学で1週間の隔離がある。このことは、ホテルでの隔離が始まって、ほぼ5日くらい経ったときに大学からの連絡でわかった。

それについてはともかく、ホテルでの隔離はひとまず終了である。隔離の終了は、正式には3月1日の深夜の2時ということだった。空港からホテルに着いたのが、2月14日の深夜、もうそのときは15日になっていた。したがって、時間的にも正確に「2週間」と

ということである。より具体的には、午前 2 時に終了するが、ホテルから出られるのは、2 時、ないしは 7 時ということだった。

そこで、朝 7 時にホテルを出ることにした。7 時まえにスタッフの方が連絡に来られた。そして、荷物を持って所定の場所に行って、「隔離終了」の手続きをした。このあと、タクシーで大学に行く（戻る）ことにした。

7 「隔離」の期間

ホテルでの 2 週間の「隔離」を終えて大学に戻るとき、「隔離期間」の解釈に関して、若干の理解の相違があった。大学のほうから、といってもある先生だが、ホテルからバスは出ないのかという問い合わせがあった。確かめたところ、バスは出ないということだった。それに対して、その先生からは「隔離中なのに、なぜバスが出ないのか」という返事であった。そこには、「隔離期間」をどう理解するかということに関して、明らかな誤解があった。

つまり、「ホテル+大学（自宅）」で「計 3 週間」の隔離期間と考えるのか、それとも「2 週間の隔離」に加えて、「+ 1 週間の隔離」と考えるかの違いである。念のため、スタッフの方に問い合わせたところ、明らかに後者の理解である。現実には、隔離終了の手続きをして、「隔離健康視察解除告知書」といった書類をもらった。

上海市に関しては、ホテルでの 2 週間で「隔離」は終了する。そのあとは、上海市内に関するかぎり、どこに行こうと誰に会おうと基本的には自由である。ただし、上海から他の地域に移動する場合は、新たにそのルールに従う必要がある。したがって、独自のルールを持っている事業所（筆者の場合は大学）に入れば、そのルールに従うということになる。

事実、同じホテルにいたある日本人（ホテルにいた日本人は、その人と 2 人だけであった）は、そのまま迎えに来た友人とどこかに出かけた。しばらくして、地下鉄に乗っているというメールが届いたが、自由に行動しているようだった。

また、同じホテルにいた、ある中国人の方は上海から青島に移動して、その翌朝に PCR 検査を受けたとのことだった。そのときは、ホテルにいるようだったが、検査の結果に問題がなければ、自宅に帰って 1 週間の「隔離」と知らせてくれた。

それぞれの地域、あるいは事業所によって独自のルールがあり、それに従って行動するということである。あとで聞いた話だが、大学（学校）は、この「隔離」を含めて、かなり厳しく管理しているということだった。そういえば、復旦大学では、2週間のホテルでの「隔離」のあと、大学でも2週間の「隔離」があると聞いたことがある。

中国の大学は、規模が大きいいうえ、基本的に「全寮制」である。こういった事情を考えれば、管理が厳しくなるのもやむを得ない。

ホテルでの2週間の「隔離」が終了したあと、筆者はタクシーで大学に戻り、大学の宿舎で1週間の「隔離」生活が始まった。ここでも、担当の方が朝、昼、夕食の三食を運んでもらっての生活であり、これまでのホテルでの隔離生活と大きく変わることはない。

大学に着いたのは3月1日の月曜日だったが、その週末にPCR検査を受けた。その日の夜、連絡がきて、隔離は7日の日曜日まで、その翌日からは自由に行動してかまわないということだった。もっとも、すでに大学では新学期が始まっており、月曜日からはすぐ授業であった。

こうして、計3週間の隔離生活が終わった。時間、空間、生活、そのすべてにおいて別世界にいたような印象である。この間、たしかに上海にはいた。しかし、上海で生活はしていない。これも、また不思議な3週間である。

8 中国の感染防止対策

それにしても、中国の感染防止対策には、驚くばかりである。徹底しているというか、かなり完璧な「抑え込み」対策である。明らかに、それが効果をあげていることは間違いない。

その対策を象徴しているものの一つに防護服がある。成田で機内に入って以降、ホテルでの隔離生活が終了するまで、普通の服装の人に会っていない。福岡から成田までの国内便では、空港職員、客室乗務員ともに、マスクはしているが普通の服装（制服）であった。ところが、成田から上海までの国際線は、客室乗務員も、そして上海に着いたとき窓から見えた空港職員も、すべて防護服であった。

空港での手続き、検査をはじめとして、上海に到着後の一連の状況はすべて述べたとおりだが、我々に対する対応はすべて防護服を着た、いわゆる「医療スタッフ」と呼ばれ

ている人たちである。空港でも、ホテルでも、対応はすべて「医療スタッフ」の人たちで、空港職員でも、ホテル職員でもないと思われる。じつに、物々しい雰囲気であった。

ホテルでの隔離が終わって気づいたのだが、このホテルは一般の営業をしていない。つまり、「隔離専用」のホテル、というより施設である。廊下の床、壁にはビニールが張られ、ときどき消毒をする音が聞こえていた。すでに書いたように、対応はすべて防護服を着たスタッフである。ホテルの一室の窓から眺めていると、敷地内に数棟のテントが張られており、そこで防護服に着替えたり、消毒などしている様子であった。

こういった一連の事実だけをみても、中国の感染防止対策の徹底ぶりがうかがえる。なにより、空港、そしてホテルで対応に当たってるスタッフの人数は半端なものではない。しかも、この時期は春節のお休みの最中である。人材確保の側面、とくにそれを支える経済的な基盤が、かなりの規模に達していることは想像に難くない。

筆者が体験しただけでも、人材確保、それを可能にする経済的な基盤は、相当な規模にのぼる。しかも、現実には、ほとんど毎日、いろいろな国々から、これまで通りではないにせよ、大量の外国人と、中国に帰国する人たちがいるはずである。それに対応するためには、考えられないほどの多くの負担がかかっているに違いない。

このことは、大学での隔離に関しても同様である。朝、昼、夕食の三食をドアのまえまで届けてくれたのは宿舎の人ではなかった。それだけでも、ある意味で特別の「待遇」である。

中国の徹底した感染防止対策は、入国する外国人や、帰国する人たちに対してだけではない。いま、国内では感染者はほとんど出ていないが、それでも中国の対応はとても慎重である。外国人に対する「水際対策」が厳しいのは当然だとしても、国内的にも規制はそれほど緩やかにはなっていない。

地下鉄、バスなどの公共交通機関を利用するときはマスクの着用が義務づけられている。地下鉄については、乗車のときだけではなく、通路を歩いているときでも、厳しくチェックされる。デパートなどでも、入るときに「健康コード」の提示が求められることがある。居住地（例えば上海）から地域外に出るときは、申請、許可制である。地下鉄の改札口など、街中のいたるところに検温用のカメラがセットされている。

なかでも、とくに学校（大学）は厳しい。門を入るときは「健康コード」のチェックがあり、入ってすぐ検温がある。大学の中でも、たとえば食堂に入るときも検温がある。ある大学では、学外者が訪問するときは、事前にかなり詳しい内容の申請書に記入して許

可をとる必要がある。ちなみに、この大学では、食堂のテーブルの上にビニール製の仕切り版がまだ置かれている。

新規感染者が、相変わらず1000~2000人規模（2020年10月3日現在）の日本の状況と比べると、その防止対策の違いは歴然としている。

9 「大丈夫」という意識、「怖い」という意識

今回のこの事態は、いうまでもなく世界的なものである。しかし、これに対する対応や対策には、かなりの差異がある。あえて表現すれば、厳しい管理を徹底している中国、緩やかな管理（都市封鎖程度の）の欧米。これに対して、日本は一人ひとりに良識とまじめさを求めるだけで、管理はほとんどないに等しい。

むろん、日本は管理はないといっても、飲食店などには営業時間の短縮をはじめ、一定の規制はある。ただ、一人ひとりに対しては、自粛が基本であり、いわゆる「管理的」要素はない。

そうした事情の違いを反映するかのように、人びとの意識にもかなりの差異がある。中国の人たちからは、感染が「怖い、怖い」という声をよく聞いた。こんな言葉は、日本では聞いたことがない。日本で「第3の波」と呼ばれて感染者が急増しているときでも、みんなのんびりとしている様子だった。

それをニュースで見た中国の人たちは、「日本人は感染が怖くないんですか」とよく聞かれた。それがどうこうということではないが、中国の人たちは、こういうことに関して慎重というか、とても神経質だという印象を受ける。ちょうど1年ほど前のことになるが、上海に住んでる人が3ヶ月間まったく外に出なかったという話を聞いた。そのことを話したら、別の人から「いや、9ヶ月間一步も外に出なかった人もいる」ということだった。

そういえば、成田から上海への乗客のなかにも、おそらく中国の人だと思われるが、数人は防護服であった。筆者が上海に戻るとき、中国の先生や学生たちから連絡をもらったが、消毒液を忘れないように、手袋は持ちましたか、マスクは重ねてしたほうがいい、などなど、じつに懇切丁寧なアドバイスをもらった。その一言ひとことに、慎重な姿勢というだけではなく、感染が「怖い」という中国の人たちの心情を強く感じた。

これに対して、日本はずっとそれほどの切迫感や緊張感はない。「緊急事態宣言」が出

されても、どこか「大丈夫、大丈夫」という雰囲気がある。「第 3 の波」が収まってきた 2 月始めになると、マスクをしていない人も見かけた。マスクなしで大声で話して通り過ぎている人までいる始末である。なかには、「わたしはマスクはしません、大丈夫ですよ」と自慢げに語る人までいる（これは、さすがに非常識だと思うが）。

さきほどから述べているように、感染防止に対して、中国はかなり厳しく対処している。中国の人たちの慎重な姿勢は、そうした状況の反映なのか、それとも中国の人たちのそういった姿勢が、中国の厳しい管理や対処を支えているのか。おそらく、この両者は相互作用効果、ないしは相乗効果に違いない。

いずれにしても、これも一種の文化ではないかを感じる。より大きくいえば、死生観の違いかもしれない。1 年前、まだ感染が広がっていないにもかかわらず、上海の街から道路から人が消え、車が消え、みんな家の中にじっと閉じこもっているようであった。街の様相が完全に変わってしまった光景を目の当たりにした。それは、少なくともその時点では、けっして指示されたものではない。いうまでもなく、人びとの意識がそうさせたに違いない。

そのことを考えると、日本人たちとのギャップの大きさに驚くばかりである。感染に対する意識がきわめて対照的である。中国の人たちからは、よく「怖い、怖い」という言葉を聞いた。それに対して、日本では「大丈夫、大丈夫」という言葉である。どこが「大丈夫」なのか、根拠はよくわからないが、とにかく「大丈夫」だと思ひ込んでるらしい。

曖昧だけど、大丈夫なのである。日本人はなんでも曖昧にする、日本語は曖昧。こういったことを、よく耳にする。これも、また「曖昧な日本人」を象徴する事実かもしれない。

10 「夢の中の出来事」

いま考えても、日常性としての 2020 年はなかった。日常生活をしているという実感は、無いに等しかった。この 1 年がとても早かったと感じるのは、そのせいに違いない。そして、その最終段階が、上海への移動と、隔離生活である。その数週間の生活は、いま思えば「夢の中の出来事」のようである。

その一部始終は前述した通りだが、ほとんどすべて初めての体験であった。その最たるものが、一連の手続きと検査である。訳がわからないまま、次々と進んでいくという感じだった。大袈裟ではなく、異空間をさまよっているという感覚であった。

ただ、空港でも、ホテルでも、それぞれの段階で中国の人たちのお世話になった。このことは、夢の中の出来事の一つとして、強く印象に残っている。

空港では、一緒に搭乗していた中国の人たちが、通訳をしてくれたり、いろいろ教えてくれた。このようなことは、ホテルでも同じだった。通訳だけではなく、いろいろアドバイスもしてもらった。また、ホテルのスタッフの人は、日本語翻訳アプリを使って、いろいろ説明をしてくれた。ただただ、感謝の気持ちだけである。

考えてみると、それも、これも、すべて夢の中である。そんなことを、ふと感じる今日この頃である。しかし、この「夢の続き」は、もうさすがに結構である。

11 さらに半年

さきほどまでの小論は、2月から3月にかけて書いたものである。⁽¹⁾それから、半年が過ぎた。

2020年に日常性はなかったと書いたと思う。少なくとも、日常生活をしているという実感はなかった。

それから半年が過ぎたいまは、どうか。2021年のことである。一言でいえば、「非日常が日常になった」ということだろうか。非日常的な生活が、いつの間にか日常的な生活になった。これが2021年である。

不思議な年は、2020年で終わらなかった。2021年も、やはり不思議な年である。事態は、ずっと継続したまま、よりいっそう深刻さを増しているようにも思える。

感染をかなり抑え込んだ中国でも、まだまだ従来生活を完全に取り戻したというわけではない。いまでも、公共交通機関ではマスクが義務づけられている。街中のいたるところに、検温カメラが設置されている。デパートに入るときなどに、「健康コード」の提示が求められることがある。

なかでも、大学はまだとても対応が厳しい。学内の食堂でも検温がある。学外者が大学に入るときは、許可制である。多くは、独自のアプリがあって、それに必要事項（個人情

報など)を入力し、「健康コード」をアップロードして許可を取る必要がある。また、旅行などで上海を出るときは、事前に申請が必要である。

いっぽう、日本は中国より、はるかに、はるかに状況は厳しい。この半年のあいだに、第4波、第5波が押し寄せるといった具合である。何度も何度も、「緊急事態宣言」や「まん延防止等重点措置」などが繰り返され、自粛自粛の日々である。ワクチン接種も思うように進んでいないようである。

企業などでは、ずっとテレワークや在宅勤務が推奨されている。大学や学校現場では、オンライン授業が中心になっており、部活やサークル活動なども大きく制限されている。よく話題になっているが、子どもたちが楽しみにしていた運動会や修学旅行なども中止である。

地域のイベントや音楽コンサートなども中止である。オリンピックも「無観客」ということになった。これの開催に関する是非についてはともかく、オリンピックという世界的な規模のイベントが「無観客」というのは、やはり異常である。

もはや、かつての「日常性」はどこにもない。以前、普通にやっていたことが、いまはできない。筆者に関しても同様である。もう、夏休みである。これまでであれば、日本に戻るはずである。しかし、いまは戻るにはかなりの困難をとまなう。PCR 検査、煩雑な手続き、そしてなにより隔離期間の問題である。

日本に戻れば、2週間の隔離がある。そして、また上海に戻ったときは3週間の隔離である。トータルで5週間の隔離期間である。来学期の開始時期を考えると、せっかく戻っても、せいぜい10日間ほどしかない。これでは、苦勞して戻る意味はあまりない。

いま、この小論を研究室で書いている。夏休みに入って、学内にはほとんど人がいない。ちょうど1年半前と同じような状態である。あのときも、なかなか日本に戻れなくて研究室で仕事をしていた。まったく、同じである。違うのは、消毒液のにおいがしないだけである。

2020年は、日常生活が「非日常」になった。2021年は、その非日常が、もはや「日常」になってしまった。すこし極端な表現を使えば、社会生活において異常と正常が判然としない状態のようである。

それにしても、こんな状態がいつまで続くのだろうか。というより、今後かつての「日常性」を取り戻すことはできるのだろうか。それとも、現在の「非日常性」を新たな「日常性」として受け入れるしかないのか。これに関する模索が、意識的、無意識的を問

わず、社会のあちこちで始まっているような気がする。

[注]

(1) 1～10章は、上海に戻ってすぐに執筆したものである(2021年2～3月)。本章(11章)は、それから半年たった現在の状況について加筆したものである(2021年7月15日)。

(同済大学・上海杉達学院教員 はた まさはる)

【編集者付記】

この文章は、編集を担当する私が、上海の大学に勤務する秦政春先生に依頼してご執筆いただいた記録である。今後、中国に渡航するひとの参考になればという思いで、先生はこの文章のご執筆を快く引き受けてくださった。しかし【編集後記】に書いたさまざまな事情によって刊行が遅れてしまい、「最新の情報を送り届けたい」という先生のご意向に、結果的に背くことになってしまった。この場を借りて、先生には心からのお詫びをお伝えする次第である。

とはいえ先生がお書きになった記録は、私が中国上海に渡航した 2021 年 8 月末の状況と、基本的にまったく変わらない。また現在私は、2022 年 1 月末に中国上海に渡航することになっている日本人教師（外国籍教師＝外教）と連絡を取り合っているが、渡航前の手続き、および隔離に至るまでの状況については、何も変わっていないようである。そういった意味で、先生がお書きになった文章は、2022 年 2 月 1 日の春節直前になっても、いまだ「最新の情報」であり続けている。

場合によって、先生がご経験になった状況とは、いくつか異なる点もあるので、少しだけ付言させて頂きたい。たとえば中国に向けて現在日本から出国する際には、ワクチン接種の証明、PCR 検査 2 回分の結果と抗体検査 1 回分の結果に加えて、「自我健康状況観測表」の提出が求められている。直近の 1 週間の健康状況を申告する書類である。それらの書類を領事館から指定された Web サイトにアクセスして、出国に必要な「健康コード」（中国国内で用いる健康コードとは違う「国際版」の「健康コード」である）を入手しなければならない。しかし 2022 年 1 月 28 日の時点で、指定された Web サイトには、「自我健康状況観測表」を提出する欄がない。最近提出することが決まったばかりなので、Web サイト上に、まだ提出する欄が作られていないのである。PCR 検査の陰性証明や抗体検査の陰性証明をアップロードするところなど、とにかく画像がアップロードできるところに、「自我健康状況観測表」もアップロードすればよいということだったのだが、これが日本人には難しい。中国人であれば、「自我健康状況観測表」を提出しろと言われていたのだから、PCR 検査のところだろうと、抗体検査のところだろうと、画像をアップロードしておけばいいだろうという機転を利かせることができるのだが、四角四面の日本人はどこに提出すればいいのかわからなくなってしまい、泡を食うことになる。これもまた貴重な「異文化体験」だと思えば、それなりに楽しむこともできるかもしれないが、「健康コード」の申請は出発前日の 20 時までに終わらせなければ、翌日飛行機に乗ることはで

きなくなる。そうした切羽詰まった状況なので、私の知り合いも大わらわになったようだ。

また現在私が連絡を取り合っている日本人教師は、ホテルで3週間の隔離をすることになっている。上海に渡航した後、大学が用意した專家楼（外教用のホテル）で生活することになっているのだが、大学側が專家楼での「自宅隔離」を認めないため、1週間の「自宅隔離」もホテルで行なわなければならない。2週間のホテル代に加えて1週間分多く宿泊費を支払うことになるので、金銭的な負担は大きくなる。飛行機のチケットもコロナ以前に比べると格段に高騰しており、隔離費用だけでなく、渡航のためにはPCR検査の費用なども含めて、かなりの額を支払う必要がある。これらの費用を大学側が負担してくれる可能性は少なく、また負担してくれたとしても、ほんの一部だけである。そうした中で中国への渡航を決断することは、外教にとっては決して簡単なことではない。

他方、目下のところ、中国に渡航したくても渡航できないでいる外教が数多くいることも事実である。コロナ以前から外教として働いていた先生であっても、ビザの有効期限が切れているため渡航することができず、中国の部屋に2年以上帰れないままにいる先生も少なくない。2022年1月現在、上海は外教への「招聘状（邀请函）」を発給していない。ビザの期限が切れている外教は、この「招聘状（邀请函）」がないと中国への渡航は不可能である。そうした状況下であれば、大学側が慎重になって、專家楼での「自宅隔離」を認めないということも仕方がないのだろう。

実は私も、秦先生と同じく、2021年2月に上海に戻るつもりでいた。私の場合、ビザは切れていなかったものの、その時期は「招聘状（邀请函）」がやはり必要であり、大学に手配してもらって、すでに手に入れていた。飛行機のチケットも予約し、あとはPCR検査を受けるだけという状況になっていたのだが、予約していたフライトがキャンセルになってしまった。別のフライトで行くことも考えたのだが、大学側と協議して、結局2021年春学期も、私は日本でオンライン授業をすることとなった。

春学期を終えた後、私は渡航の準備に着手した。「招聘状（邀请函）」の有効期間は過ぎていたのだが、春学期が終了した6月末の時点では、有効期限内の「居留許可証」があれば、「招聘状（邀请函）」がなくても渡航可能とのことだった。私は8月20日に成田空港から上海の浦東空港に向かうフライトを予約した。幸いなことに、私の日本での居住地は東京であるため、福岡から成田に移動しなけりばならなかった秦先生よりも、手続きやPCR検査はずっと楽だった。福岡から成田への移動の部分を除いて、先生がお書きになった内容は、私が経験したこととまったく同じである。

8月20日に上海に渡り、上海での居住地に近い楊浦区のホテルで私は2週間の隔離を行った。上海にひとりで隔離することができる家を持っている者は、2日ほどホテルで隔離した後、自宅に戻ることができるという話を聞いていた私は、空港で隔離するホテルを差配している担当者に、ホテルでの隔離を早めに切り上げて、自宅で隔離したい旨を伝えた。こちらの条件を確認した担当者は問題ないと判断し、私が居住する小区（マンションがある区域）を管理する委員に連絡してくれた。2日ほどの隔離だから安いホテルで十分だろうという担当者の提案を聞き、私は楊浦区の一番安いホテルで隔離することになった。1日280元である。たしか最も高価なホテルは、1日480元だったように思う。

翌日の21日のことだった。私の携帯電話が鳴った。小区の委員からの電話だった。2日ほどで隔離を終えるつもりでいた私は、委員にいつ戻っていいか確認した。先方の返答は予想外のものだった。ホテルでの隔離の代わりに小区で隔離することは認められない、2週間はホテルで隔離しなければならないと、委員は私に諭すように話した。こうして私の狭い部屋での隔離生活が始まった。

隔離生活は「気楽で快適であった」と秦先生はお書きになっているが、狭い部屋での隔離は、私にとってはなかなかつらいものがあった。救いだったのは、Wi-Fiが安定していて、「优酷视频」「腾讯视频」などのアプリで映画を好き放題見ることができたことと、「淘宝」「京东」「当当」といったオンラインショッピングが自由に使えたことである。隔離の間に私は30本ほどの映画と、その時評判になっていた「扫黑风暴」という連続テレビドラマ28話を見て、ある意味で充実した時間を過ごすことができた。「当当」で読みたかった蘇童の小説も何冊か購入して、『武則天』を読み終えた。「淘宝」と「京东」で速乾性のTシャツとズボンを買って、運動不足を解消するためにヨガマットも手に入れた。しかし、洗濯しても干す場所がないので購入した部屋で使える組み立て式の物干しは、「危険だ」という理由で部屋に持って来てもらえず、値札を切るために勝ったハサミは、「論外だ」と一笑に付されてしまった。隔離が始まる前に渡された規約書には、アルコールとタバコ以外は問題ないと記されていたので、交渉を試みたのだが無駄だった。秦先生のような達観した境地には至れぬままに、私はホテルでの隔離生活を終えることとなった。

ホテルでの隔離を終えた後、秦先生と同様、タクシーで自宅までの移動し、「自宅隔離」が始まったのだが、その状況はまったく異なっていた。私の居住地は大学のキャンパスの外にあるマンションである。大学側が宿舎として用意しているマンションではあるが、外国人教師が宿泊するための専門家楼とは違う。それゆえ日々の食事は、すべて自分で用意し

なければならなかった。「自宅隔離」を終えるまでは、公共の交通機関を使うことができず、スーパーなどに行くことも控えるように言われていた。その期間、私は「美团」というアプリを使い、デリバリーで食事を頼み続けた。ちなみにコロナ以前は、「美团」でデリバリーを頼むと、部屋まで送り届けてくれた。しかしコロナ後は、デリバリーの配達員は小区の中に入れない。小区の入口に柵が設置され、そこまで取りに行かなくてはならなくなった。配達員から小区の入口の柵に商品を置いたという電話を受け取るたびに、私は18階から1階まで下りて、小区の入口まで食べ物を取りに行かなければならなかった。

ホテルでの隔離生活が終わる2日前くらいだったと思う。小区の委員から電話があり、居住地域を管轄する医者連絡するように言われた。告げられた電話番号に電話をすると、その人が「自宅隔離」の7日間、私を担当することになった医者であることがわかった。ホテルでの隔離が終わったら、その翌日、指定された「衛生中心（衛生センター）」に行き、そこで「核酸検測（PCR 検査）」をするための書類を受け取り、その後、指定された病院に行って PCR 検査を受けるように告げられた。衛生センターには午前8時前に行かねばならず、指定された病院で PCR 検査が受けられるのは午前10時までのことだった。衛生センターは歩いて15分くらいの距離だったが、指定された病院までは自転車でも30分以上はかかる。コロナ以前に私が使っていた自転車は処分されたようで、見当たらなくなっていた。街の至る所にレンタルの自転車が放置されていたが、隔離中の身であるがゆえに、それを使うのとはばかれる。公共交通機関を使うこともできない。それゆえ衛生センターで書類を手に入れた後、私はすぐに「滴滴出行」というアプリでタクシーを呼んで、病院へと向かった。

「自宅隔離」の期間、義務づけられたことは毎日2回体温を測り、小区の委員に報告することだった。念を押されたのは、たんに体温を報告するだけでは駄目だということだった。体温計の写真と、体温を脇に挟んで測っている写真を、毎日送るように強調された。それゆえ私は毎日午前中と夕方、小区の委員に体温が表示されている体温計の写真と、体温を脇に挟んで「自撮り」した写真2枚を、SNSの「微信」で送り続けた。自宅隔離を終えるまで上海の「健康码（健康コード）」「行程碼（行程コード）」が緑にならない。この2つのコードが緑にならない限り、大学のキャンパスに入ることもできず、公共交通機関を使うこともできない。それゆえ制限のある生活を1週間送らなければならなくなったのだが、それでもホテルでの隔離よりはずっと楽だった。1年半以上住んでいなかったため、上海の部屋にはさまざまな問題が待ち受けていた。捨て忘れたバターが残っていた冷蔵庫

はひどい臭いになっていたし、シャワーカーテンはぼろぼろになって崩れ落ちていた。書斎で使っていた革張りの椅子はカビだらけになっていた。生活を立て直すべく、私は掃除とオンラインショッピングに追われることとなった。

「自宅隔離」の1週間が終わる当日、私は再び指定された病院に行き、PCR検査を受けた。夕方担当医から、陰性だったという連絡があった。これで翌日からは隔離と無縁の生活となる。その後は大学のキャンパスに入るための許可をもらうための手続きに奔走し、慌ただしく新学期を迎えることとなった。これが私が経験した隔離生活である。

秦先生がお書きになった記録と、私が補足した内容は、すべて上海のものである。中国では地域によって、隔離の政策が異なるところがある。またひとりでも感染者が出たら、その区域は「低危険地区（低レベル危険地域）」や「中危険地区（中レベル危険地域）」、場合によっては「高危険地区（高レベル危険地域）」に認定され、管理は一気に厳しくなる。そうになると、隔離もよりいっそう厳重になる。したがって上海以外で隔離をする場合や感染者状況によっては、当てはまらないところもあるかと思われるが、基本は同じではないだろうか。

隔離生活を終えた後、しばらくしてから見かけたニュースがある。廈門のニュースだったと思う。ある夫婦がホテルで隔離をしていたのだが、夫がこっそり妻の部屋に行っていたことを伝えるニュースだった。隔離政策に違反したということで、「処罰通告」が出されていた。ホテルでの隔離にはなかなかつらいものがあつたのだろう。中国人の同僚たちは大笑いしていたが、隔離を実際に経験した身としては、笑いながらも笑い切れないでいた。隔離せずに中国と日本を行き来することができるのが、少しでも早くやって来ることを心から待ち望むだけである。

（『アジア・文化・歴史』編集代表 山本幸正）

[2022年2月14日付記]

上記の【編集者付記】を書いた後、私が現在連絡を取り合っている外教が2週間のホテルでの隔離を終え、3週間目の隔離に入った。2週間の隔離終了後は、別のホテルに移動しなければならない。1泊400元ほどのホテルか、250元ほどのホテルかのどちらかを選ぶことはできるが、ホテルの場所などを選ぶことはできない。指定されたホテルに、用意されたバスに乗って移動することになる。知り合いの外教は400元のホテルを選び、2週

間隔離生活を行なった浦東のホテルから、虹橋空港近くのホテルまで移動し、そこで隔離を行なうことになった。

3週間目の隔離では、隔離の条件が少し緩和されるようだ。2週間目の隔離までは個人個人で隔離生活を行なわねばならず、家族であっても同じ部屋に滞在することはできない。しかし3週間目からは、家族であれば、同室に滞在することも可能となる。また、やむを得ない事情がある場合には、外出も認められている。ただし申請書を提出して、ホテルがある地区で衛生管理を担当している部署からの許可が必要である。中国に入国するために取得した健康コードは、この時点では緑になっているが、上海で使用する健康コードや行程コードが緑になっていないため、公共交通機関を使うことはできない。それゆえ、実質的には外出はほぼ不可能に近い状況である。

3週間目のホテルでは、デリバリー（外卖）を使うことが推奨されている。電話でホテルに問い合わせたところ、夕飯はホテルが用意する弁当を注文することが可能だが、朝と昼はデリバリー（外卖）で注文してほしいということだった。しかし、ここで問題が出てくる。現在隔離中の外教は、中国大陸の電話番号を持っていない。中国大陸の電話番号がなければ、デリバリー（外卖）のアプリを活用することは不可能である。ホテルからは私が外教に代わってデリバリー（外卖）を注文するように言われたが、交渉の結果、昼と夜はホテルの弁当を運んでもらえるようになった（結果的には、なぜかはわからないが、朝食も用意されて、部屋の外に置かれるようになったらしい）。

次に問題となったのは、3週間目の隔離を終えた後のことである。隔離を終えた後、外教は外教の宿舎である專家楼に入ることになっている。專家楼に入るためには、直近のPCR検査4回分の陰性証明と、緑色の健康コードと行程コードが必要である。しかし外教は中国大陸の電話番号を持っていないため、健康コードと行程コードを手に入れることができない。それゆえ、3週間目の隔離を終えた後に、まず電話会社の営業所に行き、電話番号を手に入れる必要がある。だが、3週間目の隔離が何時頃に終わるのかは不明である。電話会社の営業所の営業時間内に間に合わなければ、外教は專家楼に入ることはできない。もちろん健康コードと行程コードを入手していないため、他のホテルなどに宿泊することも不可能である。ホテルに勤務する医者に問い合わせたところ、最後のPCR検査の陰性証明が出たらホテルを出ることができるという回答しか得られなかった。おそらく14時くらいには出られるとは思いますが、確定することはできないということだった。万が一のことを考え、外教には1日延泊してもらい、隔離を終えた翌朝早くにホテルを出て、電話会

社の営業所に行き、その後健康コードと行程コードを手に入れた後、專家楼に行くということにしていた。

2週間目までのホテルでもそうだったが、3週間目のホテルでは、とりわけ中国語でのやり取りが必要となる。また有効な中国大陸の電話番号を持っていないのであれば、隔離生活の間、綱渡りのような日々を送ることになる。ただでさえ不安に陥りやすい隔離生活で、いっそう精神的に追い込まれる可能性も出てくる。ちなみに現在隔離中の外教が所有しているスマートフォンは日本で購入したもので、SIMフリーではないものらしい。そうになると、電話会社の営業所で電話番号を入手しても、SIMカードが使えない可能性も出てくる。こちらでスマートフォンを購入するにしても、健康コードと行程コードを入手していないため、入店できない可能性が高い。それゆえ外部の人間が隔離中のひとに代わって、あらかじめスマートフォンを購入しておかねばならなくなる。

今後、隔離政策がどのように変化するのは定かではないが、3週間の隔離を乗り切るためには、ホテルのスタッフや医者などと交渉ができる中国語力と、中国大陸で使用可能な電話番号（少なくとも中国大陸で使用可能なSIMフリーのスマートフォン）があったほうが安心である。現在の隔離政策が続く限り、中国語ができず、中国大陸の電話番号を所持していない外教を招聘するのであれば、外部からのかなりの手助けが必要となる。

3週間目からのホテルでの隔離生活がどのようなものであるのか、私自身もまったく知らなかった。ここに「付記」として記録させていただいた次第である。

(山本幸正)

アジア・文化・歴史 第13号

発行 2022年2月28日発行
編集者 アジア・文化・歴史研究会
編集代表 山本幸正
事務局代表 内藤寿子
発行所 アジア・文化・歴史研究会（東京都新宿区）
asia2016_ch@yahoo.co.jp
印刷所 西安文印社（中国）

ISSN 2423-9461

ASIA · CULTURE · HISTORY

亚洲 · 文化 · 历史

亞洲 · 文化 · 歷史

No.13

February 2022

Edited and Published By

The Society for Research on Asian Culture and History

Tokyo, Japan